

## 必読書として推薦します

ケアのポイントを衝く現象学的身体論

大井 玄

（東京大学名誉教授）

本書は、看護の立場から書かれた現象学的身体論とも言えましょう。随所で感嘆しながら読みおえて、著者の文化人類学的調査から書かれた古典『痴呆老人が創造する世界』（岩波書店、2004年）と並ぶ名著だと思いました。現実に認知症高齢者のケアに従事する者には、はっとさせられる記述が多く、それらはまさにケアのポイントを衝いています。

たとえば、著者言うところの「原初的身體」です。言語による論理的な意思疎通が不能になった段階の認知症高齢者との身体感覚を通じた意思疎通については、わたしの経験に照らしてもよくわかる話です。

わたしがいる施設で診る一人の女性は、排泄のコントロールもできず、食事の際にお箸の使い方もおぼつかなくなり、そこらのものを触わり（世界の再分節）うろうろ歩いています。診察は普通にはさせてもらえませんが、「故郷」を歌ってあげるとおとなしくなり聴診させてくれます。診察はベッドに彼女と並んで座り、背中をゆっくりさすりながら行ないます。彼女の心理状況が伝わってくることもあります。著者は「ケアする手は体の境界を超える」「相互浸透する」と表現していますが、言い得て妙です。

認知症高齢者の中核的情動は不安であると確信していますが、どのようにして安心させるかは、やはり視覚、聴覚、接触感覚を通して、こちらの善き意思を、相手の認知能力低下と発達初期への遡行の程度に応じて、うまく伝えることによるようです。驚いたことには、二千五百年前に、ブッダはこの事実を見抜いていたようで（マジマニカーヤ）、さすがに八十歳まで生き、老耄の悲哀も体験した方だと感心します。

著者が例に挙げている大先輩の看護師やCNSがさすがだと思うのは、背中を触っただけで体の何処が具合の悪いのか判るところです。鍼灸やマッサージ師は特にこの点鍛えられているようです。わたしの友人に施療家がありますが、彼が言うには、「邪気」が手に浸透してくるので、施療中は時々手をふるってそれを散らせてやる必要があるそうです。

人間存在を重層的に解釈する場合、著者のように意識的、オノマトペ的、原初的という、いわば中心に向かう多層的構造理解の仕方と、ヴィクトール・フランクルのように、下から上への多次的（身体的、心理的、精神的“spiritual”）構造として理解するやり方とがあるように見えますが、わたしはどちらでも、違いを意識するとともに、関係性のなかで、一つの全体として holistic にとらえる

視線があればよいのだ、と考えています。ただ、認知症高齢者を理解する場合は、中心へ向かう多層的構造として考えていくほうが、ケアにおいて自然であるように思います。

「アルツハイマー型認知症は病気ではなく、その精神症状は老耄の現れである」というテーゼは、松下正明前東京都健康長寿医療センター理事長が唱えられたものですが、わたしもそれに賛成します（現在エッセイを連載中の月刊「みすず」12月号に、その論考を載せます）。生老病死の過程における諸現象をすべて「病氣化」する傾向は、医師の知（痴）的反射ともいうべき習性のように思われてなりません。本書がそれに対する痛い一石であってほしいと思います。

看護師の必読書としてだけでなく、真剣に看護、介護、医療にかかわる人たちに広く読まれるべき書として推薦します。